

軽みと写生

谷地 快一

【本日の話】いろいろな「軽み」論があつてよい(稲葉有祐氏)▼好きなように話してくれてよい(中森康之氏)▼研究史を踏まえた学術的な論旨を整える見識はないので、「軽み」「写生」のカギ括弧を外して、芭蕉と近代俳句との通路をさぐることに。それは、たぶん実見(実景)の尊重と寛容(谷めないこと、現世を承認すること)だと思ふ。

【写生などを持ち出す理由】俳諧研究を始めた際に村松友次(紅花)なる師匠が俳人であることを知らず▼以後句作を続け、師匠没するまで句会に引きまわされる▼俳諧研究者は句作をするものと信じて研究会や学会へ▼学会でも俳壇でもマイノリティなるを自覚▼平成十八年に学者でも俳人でもない、その中間の道を求めて芭蕉会議スタート▼僧にもあらず、俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうぶりの(芭蕉・鹿島詣)▼平成十九年に無花果句会を引き受ける。

【村松友次(紅花)】正岡子規(ホトトギス)▼高浜虚子(ホトトギス)▼高野素十(芹)▼村松紅花(雪・葛)。

【無花果歴代庵主】井本健作(元山人)▼井本農一(茫亭)▼高藤武馬(馬山人)▼青木幹生▼井本商(三田痴)▼谷地快一(海紅)。芭蕉は特殊な俳諧師】俳諧は近世の人々にとつて最も安直で身近な楽しみであった。その楽しみかたも実に多様で、親しい人々と句会を開く、刷物・選集として刊行し知人に配る、発句合・前句付に投句し入選落選に一喜一憂する等々であるが、懐紙・画賛・短冊を染筆し遣り取りをすることも楽しみかたの一つであつた筈である。短冊を染筆したのは著名俳人のみの仕業ではない。(略)俳諧史に全く痕跡を残していないような人たちでも短冊を染筆し遣り取りをして楽しんだ。その事実をより広く認識することによって、俳諧という文芸の在り方を正確に把握出来るのではないだろうか(永井一彰・俳諧短冊纂攷序・2022.8)

【注】『俳諧短冊纂攷』はDVD-RW版。先に『俳諧短冊手鑑』(2015.8 八木書店)を出版した氏が「全てカラー図版という無謀な企てに付き合つてくれる版元、何処にもおられません(中略)、私家版ならぬ私家盤」(添状)の家蔵俳諧短冊三千枚余の整理。

【師説】人は自分のレベル以上のことは理解できない▼我々のようなサラリーマン学者に芭蕉を理解出来るはずがない。【私説】軽みは重みと相対的な関係にある。つまり、抽出された二者の比較において(AはBより軽い)あるいは(AはBより重い)というふうにあられる。芭蕉の場合、その規矩は実見(実景)と寛容(あわれの承認)の実践ではなかるうか。近代俳句の写生も究極は芭蕉の到達点と同じではなかるうか。

一、明白な実見(実景)論 (嵯峨日記より)

二十九日
晦日

『一人一首』奥州高館の詩を見る。

高館は天に聳えて星宵に似たり
衣川は海に通じて月弓の如し

その地の風景、いささか以てかなはず。古人といへども、その地に至らざる時は、その景かなはず。

《注》高館が天に聳えるとは誇張に過ぎる。衣川は直接海に流れ込んでいない。『一人一首』は『本朝一人一首』の略。林鷲峰(羅山の息編。万治三年(一六六〇)自序。寛文五年(一六六五)刊。最初の日本漢文学研究書で三百余人の各一首に言及。落柿舎に入った四月十八日に座右に置いた書物の一つ。『芭蕉文集』(新潮日本古典集成を参考にした。

二、『おくのほそ道』の平泉 (史実は発句の外に)

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有り。秀衡が跡は田野に成りて、金鶏山のみ形を残す。先う高館このまれば、北上川南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。康衡等が旧跡は衣が関を隔てて南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偕も義臣すくつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。国破れて山河あり。城春にして草青みたり」と、笠打敷きて、時のうつるまで泪を落し待りぬ。

夏草や 兵どもが夢の跡
(以下略)

三、『猿蓑』の平泉 (史実は前書きに縮小)

38 夏草や 兵共がゆめの跡

奥州高館にて

芭蕉

四、明白な寛容(承認)論 (去来・不玉宛論書より)

膳所ノ洒堂方句ニ、

日ノ影ヤゴモクノ上ノ親雀

二三子笑ツテ曰ク「此レ只事ナリ。発句ト云ヒガタシ」。翁之ヲ聞キテ曰ク、「二三子ノ此ノ句ヲ笑フハ、イマダ此ノ場ヲ踏マザルナリ」。右ノ句ヲ以テ、軽キヲ好ミ重キヲ惡ム差別ヲ考ヘ給ヘ。尚此クノ事、コトゴトク尽クシ難シ。暫ク筆ヲ指シテ云ク。

《注》初稿本「春の日」。再稿本「春ノ影」を改める。よつて「日ノ影」で春季という判断。「ゴモク」は(塵)「芥」。「只事」は否定的に(あたりまえのこと)。「猿蓑」に「日の影やこもくの上の親すゞめ 珍碩」。なお本文は読解の便を考慮して『去来先生全集』(落柿舎保存会)を基に送り仮名を補い、改めて書き下した。軽み(実見)によるあわれの承認の教材としてきわめてすぐれた句。

五、イマダ此ノ場ヲ踏マザルナリ(芭蕉)

まだ世の中であわれがわかっていない(人間が出来ていない)からである。(谷地解)／人は自分のレベル以上のことは理解できない(村松友次・師説)。

六、高浜虚子の素十評 (写生は現世の肯定)

厳密なる意味に於ける寫生といふ言葉はこの素十君の句の如きに當て嵌まべきものと思ふ。素十君は心を空にして自然に對する。自然は何等特別の装ひをしな

十君の目の前に現はれる。自然は雑駁であるが、素十君の透明な頭はその雑駁な自然の中から或る景色を引き抽き来つてそこに一片の詩の天地を構成する。それが非常に敏感であつてかくて出来上つた句は空想畫、理想畫といふやうな趣はなく、何れも現實の世界に存在している景色であるといふ事を強く認めしめる力がある。即ち眞實性が強い。(「秋桜子と素十」による)

磁石が鐵を吸ふ如く自然は素十君の胸に飛び込んで来る。素十君は劃然としてそれを描く。文字の無駄がなく、筆を使ふことが少く、それでめて筆意は確かである。句に光がある。これは人としての光であらう。

古今を通じて素十君の句は獨歩であるが、まづ聯想するものは、元祿の凡兆ぐらゐなものであらうか。凡兆の句とも違つてゐるが、強いて類を求むれば、まづ猿蓑の凡兆を考ふべきであらうか。(中略この光といふものを説明することはむづかしく、素十君自身にもわからんかしらんが、その人とその技巧から來てゐるものと思ふ。凡兆にもいくらあるかと思ふが、然し素十君には及ばない。(『初鶉』序による)

七、高野素十の句

柔らかき草柔らかき焰上げ
風吹いて蝶々迅く飛びにけり
乳のませきし子が眠り夏木かけ
打水や萩より落ちし子かまさきり
湖の月の明るき村に住む
石一つ崩して水を落しけり
大櫓をかへせば裏は一面火
水仙の花の伏したる雪の上

八、人間を養うために俳句を教えるのだ(高野素十)

お前には俳句を教えるのではない。人間を養うために俳句を教えるのだ。本当は人間が出来てから俳句を習う方がいゝんだが、それでは間に合わんからナ。

《注》高野素十が門下に説いた發言。長谷川耕畝「沐猴而冠」(モツコウジカン/モツコウニシテカンムリス)より抽出。長谷川耕畝著『俳人高野素十との三十年』(新瀧俳句会叢書37、新瀧雪書房刊、H5・12)所収。ちなみに「沐猴而冠」の「沐猴」は猿の類の意。沐猴而冠は「外見は立派でも内実が伴わない人物の譬え」(史記・項羽本紀)「フログ」海紅山房日誌」(二〇二〇・六・一三)の「なぜ俳句を詠むのかIV◆素十「人間を養うために…」」による。

九、『おくのほそ道』ポイントがあらわし

故翁奥羽の行脚より都へ越えたまひける、当門のはい諧すでに一変す。我ともがら笈を幻住菴になひ、杖を落柿舎に受て、畧そのおもむきを得たり。『瓢』さるみの、『是也。その後またひとつの新風を起さる。』炭俵『統猿蓑』なり(『俳諧問答』贈晋氏其角書・元祿10・閏2)

十、行脚の目的 (実見・実景の把握)

耳にふれていまだめに見ぬさかひ、若し生きて帰らばと(草加)

十一、主たる目的地(白河の関・松島・象潟)

春立てる霞の空に、白河の関こえん(深川出庵)／松嶋の月先づ心にかゝりて(深川出庵)／このたび松しま・象潟の眺め共にせん事を悦び(日光山)

《注》代表的な歌枕は発句の外に出すしかなかった。

十二、『猿蓑』に入る『おくのほそ道』の句

夏

3 野を横に馬引きむけよほととぎす 芭蕉

松島一見の時、千鳥もかるや鶴の毛衣とよめりければ

12 松島や鶴に身をかれほととぎす 曾良

奥州高館にて

38 夏草や、兵共がゆめの跡 芭蕉

39 這ひ出でよかひ屋が下の蟾の声 同

奥州名取の郡に入りて、中將実方の塚はいづくにやと尋ね侍れば、道より一里半ばかり左りの方、笠嶋といふ處に有り

44 笠嶋やいづこ五月のぬかり道 芭蕉

とをしゆ。ふりつづきたる五月雨いとわりなく打ち過るに

55 風流のはじめや奥の田植うた 芭蕉

出羽の最上を過ぎて

56 眉掃きを面影にして紅粉の花 芭蕉

秋

11 文月や六日も常の夜には似ず 芭蕉

元祿二年翁に供せられて、みちのくより三越路にかゝり行脚しけるに、かがの國にていたはり侍り

27 いづくにかたふれ臥すとも萩の原 曾良

《注》「行き〜て」(『おくのほそ道』)

加賀の小松と云ふ處、多田の神社の宝物として、

実盛が菊から草のかぶと、同じく錦のきれあり。

33 むざんやな甲の下のきりぎりす 芭蕉

遠き事ながらまのあたり憐れにおぼえて

48 月清し遊行のもてる砂の上 芭蕉

遊行上人の古例をきく

《注》主たる目的地の一つである象潟の句はなく、前書きのない句は三句のみ。実見(実景)を尊重すれば、知識

(耳に触れるものは十七拍の外に出てゆき、俳文の模索

へとつながるといふことか。

十三、「イマダ此ノ場ヲ踏マザル」句

雉子の眸のかうかうとして売られけり(加藤柳邨)

死ぬものは死に行く躑躅燃えてをり(白田亞浪)

戦争と暈の上の団扇かな(三橋敏雄)

愛されずして沖遠く泳ぐなり(藤田湘子)

白露や死んでゆく日も帯締めて(三橋鷹女)

冬蜂の死にどころなく歩きけり(村上鬼城)

足袋つぐやノラともならず教師妻(杉田久女)

(畢)